

英語に於ける形容詞としての名詞の機能

The Function of Noun Modifiers in the English Language

小 澤 清

名詞が形容詞として機能する場合について compound を概観しながら考えてみたい。

名詞の他の名詞修飾関係は十分確立しているように思われる。例えば gold watch に見られる $N_1 + N_2$ 構造で N_1 が N_2 を修飾するという事は自明の事であろう。そして N_1 が名詞である事は sports page, parcels delivery, the plains trails, a Times editor のように N_1 が複数形を取る場合があることから明らかであろう。それでは N_1 が N_2 に対して持つ関係が修飾関係になるのはなぜであろうか。結論的にいえば N_1 が生起している位置にその原因が帰せられると思われる。即ち Det N の環境に現れる要素はすべて N に対する修飾語であるとみなすことが出来る。この環境は本来、名詞修飾語としての形容詞が現れる典型的な位置であり、この環境に現れる the off side, my home return, a penny-in-the-slot machine, the not-to-forget event など、すべて名詞に対する修飾語と考えられる。したがって $N + N$ 構造と $A + N$ 構造の間には当然のことながら、かなりの共通点が見いだされる。¹

しかし我々は以下の例のような疑問に遭遇することがしばしばある。即ち 'education director' というタイトルか 'educational director' のタイトルと同一かどうか。しかしこの場合は両方とも acceptable であるといわれる。しかし, noun modifier がその意味を正確に表わすためにどうしても必要である場合が多くある。例えば* a 'book salesman' は必ずしも a 'bookish salesman' とは同じでないし, a nerve doctor は a 'nervous doctor' であっては困る。又 a 'seed merchant' は a 'seedy merchant' ではない。²

noun modifier が正しく, adjective が誤りでないにしても, 少くとも曖昧さを残

す場合は多数であり、特に日頃、新聞紙上で散見されることは多くの経験をもつところである。言語を使用する側から見れば、比較的自由に名詞を結合することにより、様々な意味を伝達できるということは、極めて便利ということになる。しかしこの自由な生成力は、ある程度曖昧さを引きかえにして、はじめて、得られるものであるように思われる。例えば、the Huxley lecture は3通りに曖昧で

Huxley 自身が行った講義

Huxley についての講義

Huxley が行った一連の講義の中の一つのいずれの解釈をも持ちうる。このような曖昧さが生ずるにもかゝらず、'N + N' 構造がしだいに増加しつつあることは、非常に多くの意味が 'N + N' という簡潔な表現で表わしうること、曖昧性は文脈によって消失するという点にその要因がもとめられよう。そしてこれらすべての傾向は、マスコミの異状な発達と無関係ではないであろう。大量の画一化された情報の流布は、一方では、短かいコンパクトな言語形式の中に複雑な内部構造をもつ情報をたたみ込むことを要求し、他方では、共通の文化的背景が、細かな内部構造の指定を不要にしていると考えられるからである。³

形容詞としての名詞

compound の中の最初の構成分子か名詞か形容が判定することは極めて困難なことがある。例えば 19 世紀の English teacher は 'cannon ball' の cannon は名詞であると答えた生徒を落第させたといわれている。⁴ 又、1880 年代に英国の学者たちがこの問題を詳しく論じている。こゝでは cannon は名詞ということになった。その理由は「'cannon ball' の前に形容詞を使って副詞を使わないからだ」と。しかしこの説明は理解に苦しむ。他の compound 例えば 'old age' は明らかに最初の構成分子として形容詞をもつが、又、形容詞によって修飾される。即ち 'extreme old age' と表現される。彼等は「'cannon' は比較されることはない」と指摘した。即ち a 'cannon-erball' といえないというのである。しかし、previous, several, yearly のような正真正銘の形容詞は比較級を持たない。更に又 12 世紀に英語は inflected language であって、名詞か形容詞かの違いを見分けるのが容易であった時には、sea water のような類似の compound の最初の構成分子は属格の名詞で、形容詞ではなかった。⁵ このことに対する解答は「そのような word は形容詞になるのに 7, 8 百年かゝったの

かも知れないのだが、square のような名詞は一貫して qualifier として使われてきたので、He who can sit squarest on a three-legged stool のように、比較級、最上級を作り出している。

殆んどどの英語の名詞もそれが形容詞であるかのように、単数形で用いられる場合が多い。即ち、殆んど如何なる英語の名詞も他の名詞を修飾するのに使われうるのである。我々がこれを属格の一種である形容詞と呼ぼうと形容詞として使用される名詞と呼ぼうと違いはないのである。

名詞の意味を限定する殆んどいかなる prepositional phrase も、その代りに qualifying noun を修飾される名詞の直前に置くことができる。こういう風に research in sociology は sociology research となり、opportunities for outdoor recreation は outdoor recreation opportunities となる。この構成は英語の起源と同じだが、しかし、1900 年以前はこの用法は短かい語又は material を表わす語に殆んど限られていた。例えば river bank, cotton dress, sea water である。その後、この用法は非常に拡大されてきた。最初多くの人はいこ新しい生成に反対したが、特に word order, death threat, child management, thought relationships のような抽象概念を表わす compound に反対を唱えた。しかし前述の如く、この construction は非常に有益なため断念できなかった。この construction は簡潔な style を作り、我々の現代感覚と大いにマッチするところがあるためである。もし長い多綴語が入ると簡潔さはそのメリットを失ってしまう。この理由のために、立派な作家たちは二音節以上の名詞を組合せることは殆んどない。しかしいくら短い語であっても例えば 'He absconded with 'River Street fire house Christmas Eve party funds' のような 8 つの名詞の連続を見ると疲れてしまうが、これは style の問題で文法の問題ではない。7

普通、価値を判断する前置詞句はこのように取扱うことができない。an ornament of value, a man of honor, a worth of distinction では単純に第一の名詞の前に第二の名詞を置くことはできないのである。即ちこの場合には valuable ornament, an honorable man, a distinguished work のように形容詞を用いなければならないのである。大抵の場合、形容詞形が価値判断的に用いられなければならないし、修飾又は限定するものとして名詞形が用いられるということは形容詞形は価値判断的であるという気持ちに通じる。このため、以下の例では、価値判断ではないので人々は教

育問題を考える委員会の話をする時は *educational committee* というよりはむしろ *education committee* というであろう。伝統的には両表現と同じ意味を表わし、互換できるのである。しかし、明確な形容詞よりの離脱傾向が強いのである。⁸

compound words

二つの名詞が並列している時、最初の名詞は *family affair* のように、明らかに形容詞の機能を持ち、二番目の名詞を修飾している。こゝでは *family* は adjective のように感じられて、全く *private affair* の *private* のように感じられる事は既に述べた所ありますが、しかし、*sea horse* のような場合は別な組み合わせである。即ちこゝでは *sea horse* の二語が一つの名詞を表わす一つの *compound noun* と感じられます。一般に二語が一つの語と感じられる時、その二語は一つの語として発音されます。*brown horse* においては、*horse* に、accent があるが、しかし *sea horse* においては *horse* は emphasis を失い、二音節語の中の二音節目のように発音される。同じく *man* は '*an English man*' の中では独立語の強勢を持つがしかし '*an Englishman*' においては全く強勢はない。*an Englishman* は或る種の *man* であるが、しかし *sea horse* は或る種の *horse* ではないことに注目すべきである。⁹

これらの factor は併列される二つの名詞が実際に one word かどうか決定される時に考慮される。もしその compound が副詞によって修飾されるなら、大抵の学者はその compound の最初の構成分子は形容詞であるというであろう。もしもこの compound が一つの大きな accent をもつならそれは一語と見做されるであろう。もしその compound が別々に考えられた二つの語の意味と違う意味を持っている場合には、それは一つの語と考えられるのである。一般的にいつて compound の発音、アクセントはその語がどうか書かれるかを決定する最も重要な要素と見做されている。文法的にどう扱われるかは大した重要ではない。¹⁰

1) solid compound

a gold fish は *gold* ではなく *a ladybird* は *bird* ではなく、*a butterfly* は *butter* できているのではなく *fly* でもない。これらの語は二つの部分が別々に表わす意味と違う場合には普通 *solid compound* として書かれる。また、第一構成分子に非常に強いアクセントがきて、第二構成分子が弱くなるような語はその意味として扱われなくなり *solid compound* として書かれる。この原則は *printing style* にかなりの混乱と変化

を惹起している。例外なく *postman* は一語に、*egg man* は二語として発音されるが、しかし牛乳を配達する人が '*a mailman*' か '*a mail man*' には議論の余地がある。誰でも '*a bookkeeper*' といい '*book review*' というが、*bookcase*, *book end* と変わる。作家はこの種の疑問で辞書をひくことはまずないが、自分の言葉に十分注意すべきである。疑問がある時はその語を分けてみるべきである。こうすれば少なくとも、*old-fashioned* といわれる位だが、しかし他の人が続けない二語を続けると *unintelligible* といわれるであろう。又、時には特別な意味も一語としての *accent* ももっていない語が、単に他の給合と似ているというだけの理由で一語になる場合がある。例えば *cowhand* は *cowboy* が一語をして書かれるという理由で、一語として書かれることがある。この現象がしばしば起るとその *compound* は辞書の中に入ってくる。*solid compound* は勿論名詞以外の品詞によって構成される場合は多数あります。¹¹

2) Hyphenated compound

例えば *secretary-treasurer*, *fighter-bomber* のようなハイフンの付きの *compound* は一人の人間又は二つの物の中の二つの明確な機能が給合される時使われます。'*a major general*' のように一つの官職を表わす二つの語はハイフンを使わないのが原則です。色彩を表わす、例えば *blue-black* のような *compound* はハイフンで結合される場合もあるし、*blue black* と書かれる場合もある。¹²

$N^1 + N^2$ 構造の N^1 の名詞について

singular form は名詞の単純基本形であり伝統的に *tooth ache*, *child laborers*, *parcel post*, *brain trust*, *a five-dollar bill* のような *compound* の中に第一構成分子として、要求されています。しかし、現代英語においては特に *American English* においては、この構成の中に多くの *plural form* が現れている、例えば *communicable diseases control* とか *welfare services funds* とか *correctional institutions specialists* 等においてである。これらの表現は多くの理由で *poor English* とされる。しかし最初の複数の構成分子は抽象観念から作り上げられた重々しい馴染のない *compound* の中で使われる時には、これを嫌う人は少ない。非常に親しみのある複数の物体の名称が第一構成分子として使われる場合にもまだ標準的とは見做されていない。例えば *teeth ache*, *geese feather*, *a five-dollars bill* 等においてである。¹³

一般的に言うと、*compound noun* は二語又はそれ以上の語の結びつきで、且つそ

れ自体特別の意味を持つ。例えば本を置くいかなる箱にも bookcase という名前を使うことができない。話し手は他の人々が受けれるような新しい compound を自由に作り出せないが, gold mine, silver mine, diamond mine 又特に科学においては body temperature 又は body weight のような例を自由に使える。¹⁴

A) 発音から見た $N^1 + N^2$ 構造の N^1 の名詞の型は大きく二つに分けられる。¹⁵

1) school friend, bathing costume のように発音する時に強勢が第一構成分子にあるもの例えば gold mine の gold は一般的に subclass を表わすのに用いられる。このように `gold mine は mine の subclass であり flower shop は shop の subclass である。同じ stress pattern をもつものは, blood test, bus driver, danger signal, electricity company, fire station, fish market, light rays, market town, music teacher, poison bottle, space ship, sports shirts, sound waves, telephone number, telephone message, traffic lights, water works₁₆

2 a) 発音において good friend とか boiling water のように第二構成分子に主要な強勢を持つもの例えば a 'gold `watch (ie a watch made of gold) である。

この型のものには cane sugar, a cotton shirt, an iron bar, a lead pencil, a leather belt, rubber gloves, a silk tie, a steel girder

a `sports ,shirt はスポーツに用いられる shirt であり a 'cotton `shirt は木綿で作られた shirt である。この構成において wood 及び wool は通常, 形容詞 wooden, woolen に置き換えられる, 例えば a wooden stool とか a woolen pullover の如く。しかし以下の表現の違いに注意しなければならない。a 'wood `shed (a shed for storing) と a 'wooden `shed (a shed made of wood), golden leaden, silken も wooden と同じ型ですが, しかし詩又は譬喩的な以下のような場合のみである。

a golden opportunity, a leaden sky a silken thread¹⁷

b) a 'gold `watch と同じになるものの一つのグループは table drawer, bedroom furniture, bedroom window, city center, town hall, school clock, government department, summer holidays, mountain roads などです。これらは例えば drawer は table に属しているとか, 休日は夏に取られることを示しています。¹⁸

B) 意味関係から見た $N^1 + N^2$ 構造の N^1 について

a) 1949 年版 *the F & Junh Wagnalls New Standard Dictionary* は形容詞として機能する名詞のカテゴリーを次のように分けています。¹⁹

- (1) With the sense "made of," as in silk dress, brick house, feather bed, pumpkin pie, stone wall.
- (2) With the sense "having the shape or the character or quality of," as in barrel vault, alligator forceps, companion picture, man milliner, man servant, boy bishop, bull calf, brother officer, fellow citizen, mesh structure.
- (3) With the sense "pertaining to, suitable for, or representing," as in parlor clock, city officer, district attorney, government employee, railroad supplies, insurance officer, church furniture.
- (4) With the sense "characterized by," as in diamond ring, cylinder press, cupola furnace.
- (5) With the sense "situated in, having a character naturally implied from situation or connection," as in *mountain streams, country gentleman, ocean steamer, school etiquette, society manners*.
- (6) With the sense "acting in support of, advocating," as in *Jackson voters, silver advocates, silver man, prohibition speaker*.
- (7) with the sense "residing, existing, or originating in, or coming from (place)," as in *Brooklyn politics, Bath brick, New York schools, Florida oranges*.
- (8) With the sense "originated or made by, or named after," as in *Armstrong gun, Williams College*.

b) 現代の英文法（研究社）の中で次のように分類されている。

- (1) N_1 が意味上の主語である場合。この場合には N_2 が派生名詞化形であるか容易に補いうる一定の動詞に対して目的語の関係にあると考えられる名詞である場合に限られるように思われる。

the U. S. denunciation of China (of. the U. S. denounced China) meat shortage (cf. Meat is short). the Lakeoff article (=the article written by Lakeoff, the Smith residence, angel visit, a Shakespearian play, the Negro problem(=

the problem the Negro produces for others)₂₁ *etc*

- (2) N₁が意味上の目的語である場合、N₂が動作主名詞化形、派生名詞化形、あるいはこれらに属する名詞である場合に限られるように思われる。

a gate keeper, a woman hater, foreign language instruction, a love poem, life insurance, a dog show, man hunts, product control, etc.₂₂

- (3) N₁が「材料」を示す場合には 'N₂ is made of N₁' とパラフレーズできる。

a stone house, a gold watch, a granite base, an iron bar, a silver cup, a cement silo, aluminum kettles, rubber boots, etc 物質名詞が 'made of' の意味で用いられない場合には ivory dealer, wood fire, wool prices などのように「第1強勢+第3強勢」という強勢型を持ち、実質上、compound となる。₂₃

- (4) N₁が「性 (sex)」を示す場合 N₁は性を示す標示にすぎず固有の意味は殆んど持たない。

boy scouts, a girl cashier, a boy actor, a woman writer, etc.₂₄

- (5) N₁が「数量」を示す場合、N₁が本来複数であっても単数形の方が好まれる。しかし、複数形が用いられないわけではない。

a sixty-dollar suit, three-cent stamp

a ten minute nap, a six-foot man ; a two-thirds majority, a ten days leave, a seven years war, a three miles walk, etc.₂₅

- (6) N₁が「時」あるいは「場所」を示す場合

a Paris banker (=a banker who has a business in Paris), London People, the Church service, holiday travel, autumn woods, a winter day, etc.₂₆

- (7) N₂がN₁の一部を示す場合₂₆

his trousers pockets, the street corner, the house window, etc.₂₇

- (8) N₁がN₂に対する「用途」「目的」を示す場合

tennis shirts (=shirts for tennis) sports clothing, school clothes, camping articles, cigar boxes, a glasses case, a school Latin dictionary, an arms budget, etc.₂₈

- (9) N₁が比喩的意味を持つ場合

a fairy lamp = a fairy-like lamp (豆電燈) a fast butterfly motion (速いチョウ)

のような動き) Cinderella girls (シンデレラ姫のような少女たち) iron ideas (冷酷な考え) a marble breast (大理石のようになめらかな胸) a baby face, animal courage, a beautiful swan dive (美しいスワン型飛込み), a pig face, the idiot smile (白痴のようになにやにや笑い) the Chomsky look (チヨムスキーに似た容観) etc.²⁹

上で述べたほかに N_1 が一般の記述形容詞に相当する場合 (e. g. a silver hair), 形状を表わす場合 (e. g. a butterfly nut) (チョウねじ), 手段を表わす場合, (e. g. a pen and ink drawing) 出所を表わす場合 (e. g. the CIA money) 等様々である。³⁰

以上まとめとして、発音から見た $N^1 + N^2$ の型の分類、又意味内容からの $N^1 + N^2$ の型の分類を三者より引用して掲げたが、すべてを網羅することは至難の業のようであるが、今後、この型はその簡便さのために増加していくと思われるが、曖昧さが生じる可能性を少しでも減じていくための principle が打ち立てられることを期待する。

参 考 文 献

- 1 Yasui M (安井稔) 1976 「現代の英文法第7巻形容詞」
東京：研究社 page 29
- 2 Morris, W. and M. Harper Dictionary of Contemporary
Usage. New York : Harper and Row, Publishers, 1975, page 428
- 3 現代の英文法7巻形容詞東京：研究社 page 33
- 4 Evans, E. and C. a Dictionary of Contemporary
American Usage. New York : Random House 1975, page 325
- 2 ibid
- 6 ibid
- 7 ibid
- 8 ibid
- 9 "
- 10 "
- 11 ibid
- 12 "
- 13 "

- 14 Close, R.A. a Reference Grannan for Studento of English, London : Longmdn Groure Limited,
1975 page 121
 - 15 ibid
 - 16 ibid
 - 17 " page 122
 - 18 "
 - 19 Ball, A. M. The Compounding and Hyphonation of English Words. New york : Funk and
Wagnalls company, page 3
 - 20 ibid
 - 21 現代の英文法第 7 巻形容詞 page 31 1)
 - 22 ibid 2)
 - 23 " 3)
 - 24 " page 32 4)
 - 25 " 5)
 - 26 6)
 - 24 7)
 - 28 8)
 - 29 9)
 - 30 page 33
- Supulementary Reading
- Gold, D. L. "Rabbit-Foot Versus Rabbits Foot : A Trend in English Compounds?," American
Speech, Spring-Summer 1975, page 149-—155